

三河における仏壇工芸

—風土地理学論的考察—

内 田 秀 雄*

On the Buddhist Family Altar Manufacturing in Mikawa

Hideo UCHIDA

(1977年9月30日受理)

1. はじめに

伝統産業としての日本漆芸の最も総合的な仏壇の地理学的調査を志してより年久しい。昭和38年に始まったが遅々として進まず今日に及んでいる。この間世のすさまじい高度成長経済策の波に押されて古きものは使い捨てられ新しきものが続々生れてきたが、またその反面ひそかに伝統的なものが見直されつつあった。殊に仏壇工芸の世界ではそれぞれの産地では強気の発言が多かった。

昭和49年「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が制定され、それらのものが国及び地方公共団体の支援と保護をうけることになった。その法第12条に基づいて昭和50年に伝統的工芸品産業振興協会（財団法人）が設立され、その産業の振興を図り、それによって人びとの生活に豊かさや潤いを与えるとともに、その地域の経済発展にも寄与せんとして、その実動に入っている。

ひと口に伝統の産業といってもその種類は極めて多岐多端にわたる。それらの振興策はいろいろ考えられているが、法第2条により日常生活の用に供せられているもので、製造課程の主要部が手工業的であり、伝統的技術技法により作られ、伝統的原材料を用い、一定の地域に於いて少なくない数の者がそれに従事して、産地を形成しているものについて「伝統的工芸品」として国が指定する道がひらかれた。伝統的工芸品産業審議会の議を経て通商産業大臣が指定するものである。すでに昭和51年度77品目（14%）従業者14万5,000人（62%）が指定をうけた。

2. 伝統的工芸品のなかの仏壇漆芸

伝統的工芸品といわれるもの536品目にも達するが一応織物染色以下16種類に大別される。織物の企業数9,434を最多として和楽器・神祇調度・慶弔用品の317を最少とするが、仏壇仏具は企業数2,296で第6位にある。生産額では織物の1,610億円を第1として仏壇仏具は324億円第7位である¹⁾。

次に仏壇の全国的広がりを表示すれば次の通りである。

三河は企業数に於いて5位、従業者6位、生産額はどこもあてにならぬが9位である。

* 地理学研究室

表1. 仏壇産地表²⁾

名 称	産 地	企 業 数	従 事 者	産額100万円
山形仏壇	山形市ほか	200	250	1,200
白根仏壇	白根市	43	206	150
○飯山仏壇	飯山市	45	216	784
○名古屋仏壇	名古屋・津島市	335	958	3,683
○三河仏壇	岡崎・知立・安城市など	159	513	774
高岡仏壇	高岡市	15	38	600
○金沢仏壇	金沢市	90	232	600
七尾仏壇	七尾市	64	150	600
美川仏壇	美川町	28	47	120
○彦根壇	彦根市・米原町	100×	311×	600×
○京壇	京都・向日・城陽・亀岡 長岡京市	374×	1,495×	4,280×
大阪仏壇	大阪府	150	1,500	8,000
姫路仏壇	姫路市	50	200	—
広島仏壇	広島市	24	459	3,045
福島仏壇	福岡県八女市	98	550	1,600
○川辺仏壇	鹿児島県川辺町	240×	974×	3,040
合 計		2,296×		32,400

昭和50年現在×印は49年，○印は「伝統的工芸品」指定

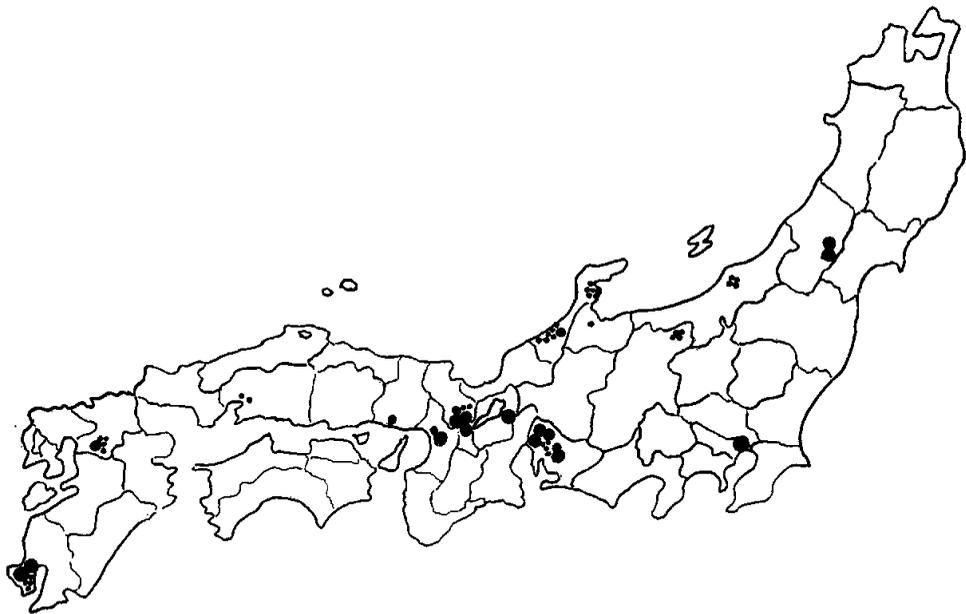


図1. 伝統的仏壇業者分布図（大中小の丸印はそれぞれ100, 50, 10の企業体を示す）

仏壇16産地中の中堅上位級にあるといえる。

3. 三河の宗教的風土

これらのうち伝統産業として地理学的立場から既に調査発表したものは山形、飯山、金沢、高岡、彦根、福島、川辺及び名古屋である³⁾。このうち名古屋の場合、その産地形成の宗教的背景について三河にも関連して若干触れておいたが、更めてまとめておきたい。

三河門徒はその歴史なかなか古く、親鸞は関東より帰洛の途次岡崎の桑子の聖徳太子を祀つる太子堂（現在重要文化財）に立寄り、ここで17日説法したことが記録されている。領主安藤信平も出家して念信房と称したという。これが岡崎市大和町の妙源寺である。寺宝に親鸞真蹟十字名号をはじめ法然の撰撰相伝の御影や現存中もっとも古いとされる三幅の光明本尊などがある。この時の機縁によって勝鬘寺の住職も親鸞の弟子となって名を了海と改め、本証寺（安城市野寺）、上宮寺（岡崎市上佐々木）も同時に同じく親鸞に帰した⁴⁾。あとの三箇寺が世に有名な三河の三箇寺でいづれも東本願寺末である。

康元1年（1256）10月親鸞84才のとき、真仏、恵信らの親鸞の高弟は都からの帰途三河矢作の業師堂で念仏を勧めて31人の入信者を得たが、おくれて12月願智も関東への帰途ここに立寄った。彼はここに3年居住して和田を中心に布教した。教化を受けた三河門徒はその後遠く高田（栃木県芳賀郡二宮町高田）を訪れて願智の如来堂に参詣したという⁵⁾。

岡崎市舩越には願照寺という親鸞ゆかりの寺がある。ここには有名な親鸞絵像「安城御影」（重要文化財）の伝わっていた所で、建長7年（1255）親鸞83才の寿像で法眼朝円の筆で東本願寺に伝わる。これと同じものが西本願寺にも伝わっている。これは上宮寺の如光が勧めて本願寺に献上せしめたものである⁶⁾。関東に次いで三河は親鸞ゆかりの土地であると云うべきである。

上宮寺は本願寺の寛正6年（1465）の破却のときその住職如光は比叡山との和解のため山門への礼銭を三河で調達して三河門徒の富強さと坊主衆の団結さを示しているが⁷⁾、これはまた永禄の一揆へとつらなるものである。家康と家臣の上宮寺、本証寺などの寺内町の特権の侵害に端を発し三河門徒と国人領主との連合による一向一揆となった。永禄7年（1564）家康は門徒と和解して寺僧一揆方士卒の赦免本領を安堵し、一揆の張本人は助命することとした。しかし、間も無く僧侶の改宗を命じ寺を破壊しその財産を没収弾圧を加えた。その後天正11年（1583）まで一向宗の厳禁はつづいたが⁸⁾、かえって信火は熾烈になった。

野寺の本証寺はこの頃末寺200を有する有力寺院であったが今も其跡残す城廓寺院である。この時の弓矢の痕跡が本堂に残っていると、わたくしの調査に際して誇らしげに話してくれた人がいた。400年の古への彼らの先祖の護法の精神が語り継がれているのである。

本願寺の蓮如は諸国門徒に親鸞絵像、弥陀絵像、十字名号などを下附して門末とそのつながりを強固にした。彼の下附したもので現在明らかにされているものが160あるが、いまそれを表示すると次の通りである。

表2. 蓮如下附物表⁹⁾

近江	43	加賀	9	信濃	5
(守山)	(19)	摂津	8	河内	4
三河	18	美濃	8	その他	12
尾張	14	越前	5	不明	19

近江43を最多として三河の18がこれに次ぐ。京に近く豊饒の地で蓮如以前特に彼の父存如以来の故地である¹⁰⁾近江に多いことはわかるが、湖南の守山が寛正の大谷破却で先づ難を避けた関係もあって、その前後の彼の活躍の初期のものが多いことが注目される。

三河では文明期を中心に延徳期に及んでいるが上宮寺には5軸下附されている。その中には寛正2年(1461)如光に下附された十字名号があって本願寺との古い関係を示すものであるが、すでに宝徳1年(1449)蓮如35才の時坂東巡行の帰途ここに立寄って如光らに接している¹¹⁾。如光らが後三河門徒を指導して、活躍したことは前述の通りである。それに答えて門徒にもたれた¹²⁾蓮如は数多くの申し物を下附したのであった。三河の人びとは近江の人びととともに蓮如のもっとも期待した門徒であったと思われる。それは蓮如には願われていなかったが時勢の赴くまま、前述の三河一揆として勃発したりした。それは信長に対して湖南の金森一揆や湖北十か寺の対抗と相通ずるものがある。

安政5年6月4日京都の火災で東本願寺は類焼の厄に遭った。翌年將軍家茂は尾州檜材4300本を寄進したがこの時三河豊橋御坊は改築中であった。18間4面総檨造りの巨大豪華なものを組立中であったが、そのままこれを京都に運び建立して阿弥陀堂とした。万延1年再建成って三河門徒の意気を示したものである¹³⁾。しかし可惜これも間も無く僅か4年後元治1年幕末の兵火で灰燼に帰した。これを受けて明治の代表的大建造である現在の東本願寺の造営に当って莫大な力を再び致した。大師堂、本堂の瓦一切の寄進である。西尾近くの志貫野で7年を要して焼成した。入念の作品であるため、今日でも光沢は建築当時(明治28年)そのままいささかも退色していない。総て31万6,391枚、大師堂平瓦1枚重さ3貫300匁(12.4kg)大棟の獅子口高さ1丈4尺(4.2m)重さ776貫(2,910kg)である。三州瓦の名誉にかけて逸品を納めたのである¹⁴⁾。

永禄一揆とは類を異にするが、明治の初め純粹の信仰上の問題から紛争が起る。明治3年三河の碧海、幡頭地方の大浜の陳屋へ菊間藩少参事服部純が赴任して尊皇踐霸、寺院統合、神前祈禱など真宗の信仰を無視したことを強制したことから真宗の高浜の専修坊法沢、永禄一揆の野寺の本証寺に近い小川の蓮泉寺台嶺らは、三河護法所(血盟僧30余人)を結成して信徒も加わってその数1万、大浜を襲撃した。暴徒は鎮圧されたが神前祈禱の如き真宗信仰の本質にふれるもの寺院の廃合も中止された。石川台嶺(26才)日雇稼業喜与七は刑場の露と消えた。明治22年憲法発布の大赦で東本願寺ではこれらの人びとを護法扶宗の人とした¹⁵⁾

孤高をまもった求道者で仏教の近代化に貢献した清沢満之も碧南市の大坊西方寺に迎えられた。白川党(京都)を結び本山改革の火の手をあげ、浩々洞(東京)を開いて暁鳥敏、

表3. 二講者一覧表¹⁷⁾

国名	数	国名	数	国名	数	国名	数
京	10	遠江	1	越前	4	豊前	3
近江	10	江戸	1	越中	6	豊後	4
美濃	9	羽後	1	越後	10	筑後	5
尾張	8	伊勢	5	加賀	6	肥前	3
三河	9	大和	1	能登	1	肥後	2
飛騨	3	和泉	1	摂津	4		
信濃	1	河内	1	播磨	2		

佐々木月樵(上宮寺)多田鼎、月見覚了らを従え新仏教運動を展開した。西田幾多郎は満之を日本哲学の最高峰に推し、日本思想界に影響を及ぼすこと多く¹⁶⁾、最近の真宗に於ける同朋会運動の原点となっている。以上は行動的三河門徒の一面の紹介である。

東本願寺では講師・嗣講・擬講の三講者を宗学の大家と

して位置づけている。正徳5年(1715)から大正15年(1925)まで嗣講以上の二講者は前表の如くである。

およそ真宗繁昌地域と対応しているが、東海地域について比較してみると右表となる。

これに依って三河に数多くの俊秀が排出していることになる。清沢満之は既に述べたが日本仏教史研究の端を開いた東京帝国大学の印度哲学教室の創設者で同大学その他で多大の行跡を残した村上專精も迎えられて御津町の入覚寺に入った。浩々洞の同人で華嚴学者後に大谷大学

の学長になって鈴木大拙を招いたりして世界の学問の上に真宗の教を明らかにせんとした佐々木月樵も上宮寺の住職であった。このほか浩々洞の同人多田鼎(蒲郡市常円寺)仏教学の舟橋水哉(豊橋市蓮泉寺)真宗史の日下無倫(刈谷市専光寺)同じく山田文昭(岡崎市正福寺)その他現存の宗学者枚挙にいとまがない。

親鸞は自からを愚禿親鸞として凡夫の自覚の上に信を成立せしめたのであるが、そのような境地に悟入した人を真宗では妙好人という。数ある彼らのうち讃岐の庄松、三河の田原のお園、石見の才市がその代表とされている¹⁸⁾。彼らの信の内容についてはここでは触れないが周囲の人びとに感化を及ぼし、その徳風は今も残っているとやや短絡的であるがこの度の調査で感得したことがあった。

このような古い歴史ある熱烈な真宗的風土の要求に応じて三河仏壇が生れて来たのである。尾張と三河その土地柄の相違を敏感に反映して三河の型が成立している。それについて

表4. 寺院と講者の対比表

国名	寺院数	講者数	寺院数/講者数
美濃	681	9	76
尾張	702	7	100
三河	407	9	45

寺院数は昭和40年現在

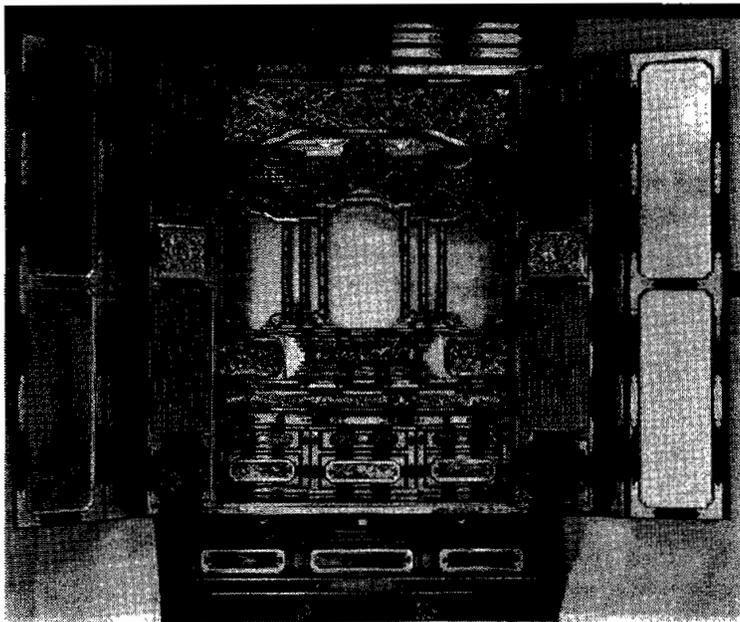


写真1. 三河仏壇 一昭和51年一(振興組合提供、以下同じ)

東木願寺型 荘厳造り。200代(大型)

うねり長押、障子の花子・前狭間・洞・屋根に豪華な彫刻がみられる。敷台に高座(僧侶の席)がはめ込んである。敬虔な精神があふれている。

ては別に「まとめ」のところにくわしく述べてある。

4. 三河仏壇の起り

都市の諸職人は集住するのが普通であるが、岡崎の仏壇町は材木町である。『岡崎市史』に享和年間（1801）の商売書上をのせているが「仏壇屋」1軒をあげている。同じく同書に天保年代（1830）材木町家並図というのがある。これによると仏壇師庄八、宇兵衛、新左衛門借家源吉、六之助という4軒がみえる。関連職人と思われる指物師が好治郎以下15名、塗物師市右衛門外2名、金具関係の鍛冶が29名ある。農具を作っていたのであろうが、仏壇金具も取扱っていたと思われる。灯燈師彫物師（権吉）蠟燭商などもある。

三河仏壇振興協同組合の調査によるとこの仏壇師庄八は唐弓絃商権次郎とともにその子孫が現存し、寛永年代末期からここに定住して、元禄年代から仏壇製造に従事していたと推定し、文化1年材木町庄屋を命ぜられ大山庄八吉野屋を号していたという。同図中の彫刻師権吉は庄八の借家人であり、その他の関係職人を加えて仏壇製造が成立していたと思われる。

現在発見されている最古のものは寛政3年（1791）三州岡崎材木柴田屋信右衛門（安城市桜井町都築満氏蔵）の銘を有するものである。幕末明治にかけて川端太吉（吉田屋）酒井、山田、清水、中村、井上などが材木町で営業し、その子孫も現在に及んでいる。天保図中の源吉、宇兵衛、六之助については明らかにされ得ないが、寛政3年作を残している材木の柴田屋信右衛門はこれらの中どれかに当るのであろうか。

材木町は連尺町に続いて本町に接する大手門近くの城下の中心街である。多くの場合仏壇町は若干の公害のため街はずれに所在するが、岡崎では中心街にある。これに依っても仏壇が尊敬されていた商品であったと思われる。今日の高級商品貴金属の類が中心商店街に商なわれているのと同様に類を同じくしている。何事にも優先する三河の真宗の風土を反映しているように思う。渡辺照宏博士も認めているごとく仏壇なるものの本来の意義を失っていないのは真宗のそれのみである²⁰。そうなればそれにふさわしき所で生産されねばならぬ。正に岡崎の場合はそのような場所である。

文久年代に親鸞と最初の接触地矢作に於いても開業をみ、近代に及んで岡崎を中心として、幡豆、西尾、刈谷にも波及して今日の三河仏壇産地が形成されて行った。

大正7年（1917）岡崎仏壇商組合が発足し昭和12年三河仏壇商組合、昭和45年三河仏壇商工連合会となり、伝統産業振興法の成立に刺激されて昭和51年三河仏壇振興協同組合へと発展した。

5. 仏壇八職

分業化、専門化はわが国工芸の特色であることは言を俟たないが、ここでも8種に專業化している。

- (1) 木地師 ひのき・ひめこまつ・あかまつ・けやき・せんのきなどを使用する。この木地師は見付（表）に木目を出すようにけやき・せんのきの木目板（厚さ3mm）を貼りつける「はぎつけ」の技術をもっている。うす板を麻縄で締めて密着させる単純なものであるが、彦根、名古屋でも行なわれている。どこがこの技術の起原であるかは明らかになし得ない。

三河仏壇には長押に3形式があり、うねり長押・かぶと長押と通し長押である。通しは直線、うねり、かぶとはそのように彎曲して仏壇内部のよく拝めるようにするも

のであるが、角材を継ぎ重ねてはぎつけ加工して継ぎ目を糊塗するもので木地師の技術である。

- (2) 荘殿師 仏壇の主体をなすもので材質は木地と同じである。真宗地域の特色を最もよく示すもので次の4様式がある。

荘殿造

堂造・宮殿造

宮殿御坊様造・御坊様造

禅宗枳組造

荘殿造 荘殿とは「おかざり」ということで、仏壇は本来極楽浄土の相を具現するもので「妙相宝荘殿」「身相荘殿」「安楽国土の荘殿はとくともつきじ」²¹⁾などに由来する仏教用語である。屋根、枳組、柱、須弥壇などを主要部とする。屋根は東本願寺は二重瓦葺き、西本願寺は一重檜皮葺きである。これは全国的に統一されている。この形式の荘殿造が一般的で最も多く造られている。

堂造・宮殿造 本尊を祀る宮殿のみを華麗にしたもの。

宮殿御坊様造・御坊様造 お脇き掛け(本尊の両脇に掛ける九字十字名号、真宗用語)の所にも二重屋根、須弥壇を設け一方に厨子造りにしてある極めて豪華なもの。その上「御坊様造」という名称に興味をひかれる。隣採の名古屋では「御坊造」とするが、三河に入れば「御坊様造」となる。「様」のつく所にこの地方の敬虔な信仰の徳風のうかがわれることを特記しておきたい。

禅宗枳組造り 本来無仏を説く禅宗では仏壇の意義が真宗とは異なる。先祖の位牌を納める所で荘殿を必要としない。しかし臨済、曹洞両禅の流行地でもあるのでこの型が作られている。

- (3) 彫刻師 彫刻は三河仏壇の特色の1つで極めて華麗である。専業者41戸、従業者66人、全国最大でそのシェアは広い。ひめこまつ・あかまつ・ひのき・あららぎなどを



写真2. 木地師はぎつけ加工 一昭和51年一



写真3. 彫刻 一昭和51年一(須弥下彫, 須弥壇下にはめこむもの)

原材とする。木曾、飛騨、信濃の良材を使用する。豪華な前狭間、宮殿屋根の中内彫、脇内彫、洞彫、須弥下彫など過剰気味の深彫刻が入り、障子の中央の花子彫は三河仏壇の特徴の1つである。

- (4) 塗師 木目出し塗り、呂色塗り(梨地、青貝、箔蒔、おも押摺り上げ)立塗などがあるが特別なものでない。

- (5) 鋳金師 内外に分れる。

内金具造(金箔焼付毛彫金具、毛彫金具、地彫金具)

表金具造(毛彫金具、地彫金具、電気鋳造金具)

- (6) 蒔絵師 泥盛り蒔絵，
平蒔絵，箔下蒔絵，彫刻
金粉蒔などがある。
- (7) 箔師 漆を塗り下拭き
して抜綿を使用して艶出
押，艶消押に調整する。
抜綿とは古い着物から抜
き出した綿を熱湯で煮沸
してよごれを落したもの
を正数糊を布巾でこした
ものに浸して乾燥したも
のである。糊に侵すのは
抜綿を引きしめ綿ほこり
の出ないようにするため
である。経験からの技術である。真綿，中入綿を小物彫刻宮殿などの箔押綿の押え，な
で払に使用する。

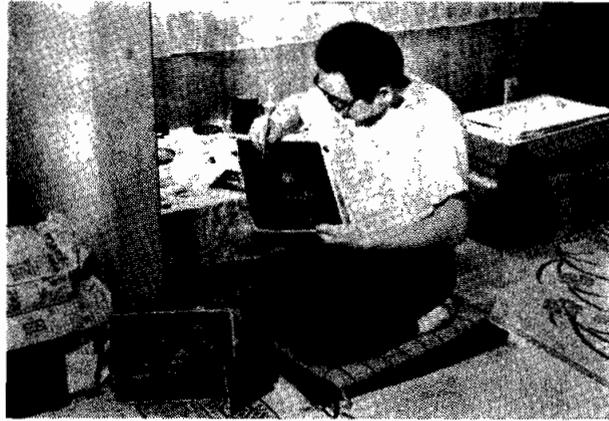


写真4. 蒔 絵 一昭和51年—
障子腰板 図柄は蓮如ゆかりの地近江堅田浮御堂

- (8) 組立師 各工程を経た
部品を組立てる。専業者
はなく塗，箔押，鋳金具
をかねている。いづれも
販売業を主としているの
で，問屋的機能と小売の
機能を併せているもので
ある。木地からの一貫製
造業者はいない，専属分
業者もいない。問屋がそ
れぞれを組合せるところ
に妙味と特色が出るこ
とになっている。



写真5. 組 立 一昭和51年— (東本願寺型荘厳造)

6. 業者の分布

三河に於けるその業者の分布は次表の如くである。

表5. 製造業者・従業者分布表²²⁾

市・町	製造 販売業者	従業者	製造業者	従業者	製造業者	従業者
豊 橋	3	10			3	10
豊 川	5	8			5	8
岡 崎	16	121	41	102	57	223
蒲 郡	5	20			5	20
西 尾	7	24	4	6	11	30
安 城	6	15	11	25	17	40

知立	8	56	4	9	12	65
刈谷	5	20	4	6	9	26
碧南	3	10	1	1	4	11
豊田	2	4	9	15	11	19
高浜	2	7	1	3	3	10
半田	2	5			2	5
常滑	1	3			1	3
豊明	1	2	2	3	3	5
大府	1	2			1	2
東海	2	2			2	2
新城	1	2			1	2
田原	1	3			1	3
御津	1	3			1	3
足助			2	11	2	11
下山	1	2			1	2
三好	2	3			2	3
幸田			1	1	1	1
一色	1	3			1	3
武豊	2	4			2	4
東浦			1	1	1	1
合計	78	330	81	198	159	513

この表は昭和51年現在で1部三河以外の地域も含まれているが、製造業者159、その従業者513である。表1で明らかな如く京都、名古屋と新興産地川辺に次ぐ大産地である。名古屋につづいて三河に大産地の形成されていることは、東海西部、濃尾三の地域が如何に経済的にも豊かな真宗地域であるかが実証される。

表6. 職種別製造業者分布表

職 種	製造販売者	同従業者	製 造 者	同従業者	製造者計	従業者計
木 地			9	26		
荘 厳			14	38		
彫 刻			34	55		
塗		49	5	24		
鋳金具		4	13	32		36
蒔 絵			3	5		5
箔 押		119	3	3		122

組立		135				135
その他		23				23
計	78	330	81	183	159	513

この表で製造・販売業者が空欄で合計のみ記載されているのは塗・箔押・鍍金具師が組立をかねているので分類できないからである。この表も昭和51年現在である。

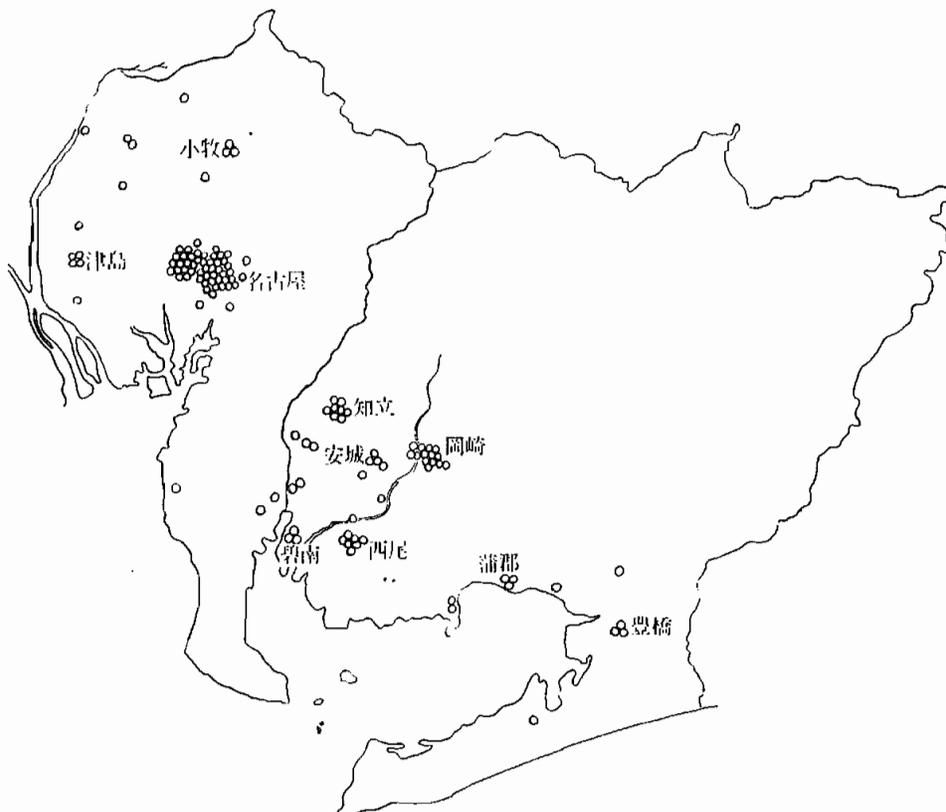


図2. 三河・尾張仏壇業者分布図

尾張は名古屋仏壇商工協同組合の名簿による。京都と同じく販売専門業者も混在している。三河は製造販売業者である。1点1企業体を示す。

表7. 生産数及び額

年次	本数	額(億円)
昭. 45	730	3.67
50	1,020	7.14

現在月産約85本、1本当たり約100万円。昭和48年以来生産はこの分野でも落ち込んだが、昭和51年度よりやや回復し年率約5%の増産を目標としている。

7. ま と め

岡崎城下の本町近くの中心地の材木町に仏壇町が近世中葉に形成され、仏壇そのものに豪華な工夫がこらされ、うねり長押で中のよく揺めるようにし、障子には彫刻ゆたかな花子をはめこみ、台輪に高座を設うけて法事にはそれを引き出して招待した導師の席とする。名古屋型にもこれがみられることもあるが三河が本流とみたい。内部のかざり付けを御坊様造りという名詮自性、これらすべてに土地の人びとの敬虔さが具現しているといえる。

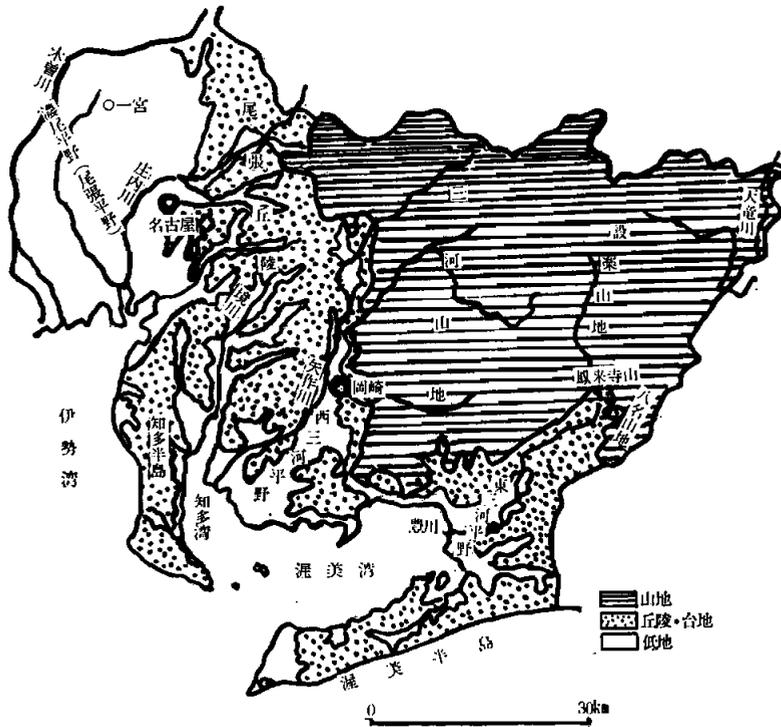


図3. 愛知県の地形区分 —町田貞原図を簡略した。—『日本地誌』第12巻(昭.44)

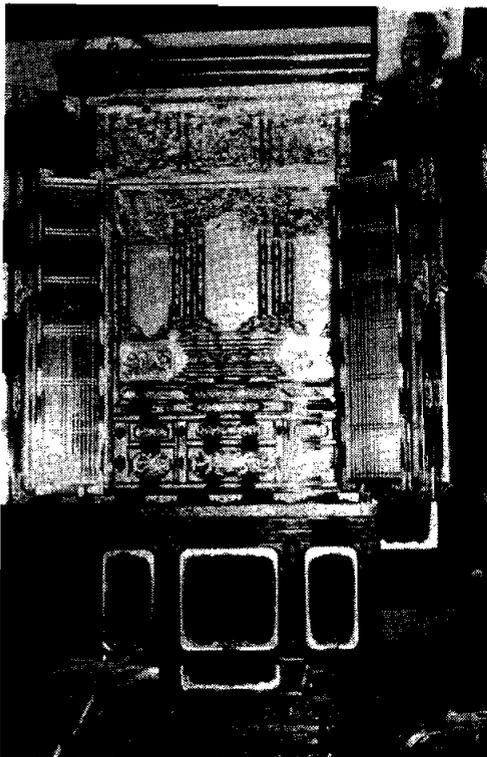


写真6. 名古屋仏壇

—昭和40年 長谷沢弘文撮影—
 高い台の上に木体があって分解式、小型である。運搬移動でき易いように工夫されている。写真1.の三河型が巾広く台座が低く堂々としているのと比較すれば、地域性が端的に投影されているのがよくわかる。

大体に於いて名古屋型と同流のものであるが、濃尾とちがって水害のない地域であるので、そのような場合の移動避難の恐れがないので、台座も低く前巾もゆったりとして、この地域の安全さを敏感に表現している。

それは端的に云へば濃尾平野と岡崎平野の地域性の反映である。両平野は尾張丘陵、知多半島を境として著しく性格を異にする。前者は河川洪水と高潮に苦しむ低地である。後者は有名な三河山地につづく台地であり、低地はわずかに東三河平野(豊橋)と西三河平野(岡崎)が

あるのみで、河川は小さく三河湾に抱かれて洪水、高潮ともに水には安全である。地理的に相接統していながら、知多半島を境としてそれぞれがその特徴を主張して「伝統的工芸品」として別々に指定されているのである。興味あることである。

9. あとがき

現地調査に際して三河仏壇振興協同組合理事長愛知屋仏壇店主太田喜八郎氏にはスケジュール多端の中を貴重な資料写真などを提供教示いただき、安城の木地師石山金次郎氏にも多くの教示を受けた。その他面接した総ての温い心の人びとに感謝する。

本稿が成って中江勲編『現代の仏壇・仏具工芸』(昭.52)という仏壇仏具の百科辞書的な大著が出版された。仏壇の歴史編担当の沢田勲氏が金沢仏壇の起原を美川に求められたのはわたくしにとって新発見であった。さらに追求していただきたいと思う。幸いわたくしの旧稿にも目を通され概説しておられるのは見事である。あえて世に紹介しておきたい。

(昭和52年秋・彼岸の中日稿了)

注

1. 『全国伝統的工芸品一覽』(昭.52) p. 4~5.
2. 前掲書によって作成.
3. 内田秀雄「山形における仏壇工芸について」『奈良大学紀要』第3号(昭.49).
 “ 「飯山仏壇について」『篠田統先生退官記念論文集』(昭.40).
 “ 「北陸に於ける仏壇工芸について」『人文地理学の諸問題』(小牧実繁先生古稀記念会)(昭.43)
 “ 『日本の宗教的風土と国土観』(昭.46)
 “ 「九州の漆器工芸」『奈良大学紀要』第5号(昭.51).
4. 家永三郎外編『日本仏教史』II(昭.47) p. 431.
5. 細川行信「三河念仏承記」『真宗成立史の研究』(昭.52) p. 259.
6. 細川行信『蓮如の旧跡と生涯』(昭.46) p. 38.
7. 細川行信『親鸞聖人聖跡集』(昭.46).
8. 家永三郎外編『日本仏教史』II
 峰岸純夫「一向一揆」岩波講座『日本歴史』中世4(昭.51).
9. 堅田修編『真宗史料集成』第2「蓮如とその教団」p. 379「蓮如裏書集」より作成.
10. 内田秀雄外編『守山市史』上巻(昭.49) p. 317.
11. 細川行信『蓮如の旧跡と生涯』(昭.46) p. 36.
12. 神子上恵竜・宮崎円遵『蓮如上人の生涯と思想』(昭.23) p. 66.
13. 「嚴如上人御履歴」『真宗史料集成』第7(昭.50).
14. 松本専成「真宗大谷派近代のあゆみ」『真宗』第774号(昭.43) p. 4.
15. “ “ 『真宗』第770号(昭.43) p. 49.
16. 西村見暁『清沢満之先生』(昭.50).
17. 「三講者名簿」『真宗大系』第37巻(大.14).
18. 雲藤義道「浄土真宗と妙好人」藤島達朗他編『親鸞聖人』(昭.48) p. 242.
19. 岡崎市『岡崎市史』第3巻(昭.47).
 伊藤郷平「岡崎城と岡崎城下町」青野寿郎・尾留川正『平日本地誌』第12巻(昭.44).
20. 渡辺照宏『日本の仏教』(昭.33) p. 101.
21. 親鸞『浄土和讃』など.
22. 三河仏壇振興協同組合の資料により作成、以下表6、表7も同じ.

Summary

City of Nagoya, Okazaki and its neighbouring region (Owari-Mikawa) are one of the most religious regions, where "Shin-Shu" or the Shin sect prevails. In our country, the Shin sect believers are commonly so pious that they want to furnish their homes with deluxe altars. Therefore, from ancient times to the present, Buddhist altars are much demanded in this region. To satisfy this demand, there occurred in Nagoya, Okazaki and their neighbouring region altar making manufactories, which are prosperous still now. We treat all about the present condition of this manufacture from the viewpoint of traditional industrial geography.

In Mikawa are 78 Toiyas or maker and dealers, each of which has several subcontractors. These subcontractors are specialized into 8 manufacturing processes. Assembling the parts from the specialists, a maker makes up an altar. Thus a maker and its dispersed subcontractors have formed a set of traditional domestic industry. At present, the production of family altar making in Mikawa ranks forth next to Nagoya in our country, and was praised recently by the Minister of Industrial and Commercial Office as a traditional domestic handmaking industry which should be protected by government.